

張愛玲『小団円』にみる恋愛と結婚
——伝記と小説との比較を通して——

鈴木 基子

本論では、『小団円』における張愛玲の生涯の主要なテーマである恋愛・結婚と離婚の諸相の根底に見られる愛の観念を通じて、小説家張愛玲をより深く考察し、さらに作家として読者を通じて世に伝えたかったことを考察した。

『小団円』は張愛玲が米国で執筆し、逝去後に出版された。作品と張愛玲に対する評価に毀誉褒貶があり、作家の実像が掴めていないのではないかと考えられる。そこで筆者は、数種の伝記・書簡・年譜・散文等から事実と推定されるもの、すなわち伝記（事象）を実像モデルの張愛玲、叔母の張茂淵、母の黄逸梵とし、小説『小団円』に登場する3人の主要人物（本人：盛九莉、叔母：盛楚娣、母：卞蕊秋）の生き方と比較考察する作業を通して、その類似点と相違点を把握することによって、愛の観念をよりの確に示し、合わせて小説家張愛玲の実像をより深く理解することを試みた。これが本論のひとつの目的である。張愛玲が『小団円』を通して、読者と社会に伝えたかったことを明示することをもうひとつの目的とした。

まずひとつ目の目的の考察は、小説家張愛玲の主要テーマである愛の観念についてである。愛の観念は「目的がない愛こそ本物」にみるように、愛に見返りを求めない純愛で、打算的でなく、報われない愛である。張愛玲と盛九莉の比較において、ふたりとも事実婚をし、愛の裏切りにあった。張愛玲には盛九莉のような三角関係はなかった。張愛玲は、最後の男性とは、相互扶助の強い愛があり、盛九莉には愛の理想と現実の乖離があった。叔母の張茂淵と盛楚娣においては、張茂淵は愛を貫き78歳で結婚し、盛楚娣には宗族慣習法の禁忌に触れる恋愛や外国男性との不倫があった。母の黄逸梵と卞蕊秋においては、離婚を経験した。黄逸梵は英国人（或いはフランス人）とだけ交際した可能性があり、卞蕊秋は婚外子を産み、多くの親族や外国人と恋愛した。このように愛の諸相は多様ではあるが、彼女らは愛情至上主義という共通観念を持っている。

次に小説家張愛玲についてである。張愛玲は、小説家として自立し、戦争や動乱の世の中において、米国への亡命という特異で不安定な環境の中で、アイデンティティの揺らぎを感じ、晩年は病魔にさいなまされながらも、独自の作家人生を歩んだ。盛九莉の方も、中国伝統文化や旧思想と、西洋文化の新思想との狭間で翻弄される中で、アイデンティティが揺らぎながらも、意志を貫いて人生を全うした。

以上のように、伝記と小説の比較において愛の観念は共通であるが、小説は伝記よりもはるかに刺激的であり、過激に脚色された創作内容が多くある。つまり、『小団円』は真の意味で小説であり、事実を大幅に脚色して、リアリティーを持つと思わせる小説家としての優

れた技巧と構成がみられた。そこで、本小説にはヒロインが張愛玲自身であると誤解するほどの臨場感がある。このような小説家としての才能と能力は、中国近代文学史において優れた作家と評価されている証でもあると思われる。

次に、ふたつ目の目的の考察は、張愛玲が小説『小団円』において何を読者や社会に訴えたかったのかについてである。以下の4点が提示できる。

1つめは愛についてである。さまざまな愛と結婚の形態、妻子ある既婚者との自由恋愛・婚前交渉・三角関係・女性からの離婚提起・婚前妊娠・中絶・国際結婚・同性愛・不倫・慣習法の禁忌・婚外子出産・恋愛依存症等の諸相がある中でも、愛情至上主義がその根底にあることを張愛玲は世に示したかったと思われる。

2つめは男尊女卑と儒教思想を基盤とする宗族家父長制・一夫多妻多妾制への反発心を示唆したことである。さまざまな愛の行為は、当時の伝統的慣習・制度の社会においては甚だしい逸脱行為である。

3つめは、女性の教育と自立である。3人の女性はともに英語ができ、海外留学経験があったことが、女性の自立の支えとなっていた。彼女らは当時の国際都市、上海の中で、西洋文化と西洋の価値観に触れる恵まれた環境があり、ごく少数しか享受できない自立した生活を営むことができた。この教育と自立の重要性を示したかったと思われる。

4つめは、子孫継承の否定観である。その背景には、名門貴族の旧家を没落させた、母娘、父娘の不順な関係にみられる機能不全家族があった。家の維持と子孫継承が当然の中国伝統的社会の中で、盛九莉は、名家に生まれたプライドを持ちながらも、当時の激動する中国社会において売国奴の血を引くわだかまりを持つ複雑な感情もあり、血の継承への恐怖と嫌悪を強く持つに至ったと考えられる。このような激動の社会の中で、家族関係にも大きな意識の変化もあることを示したかったと思われる。